広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本人の迷信についての研究
Author(s)	ブー フオン ザン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 30期 : 107 - 118
Issue Date	2015-10-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038679
Right	
Relation	

日本人の迷信についての研究

ブー・フオン・ザン

目次

第１章　はじめに
第２章　迷信の起源と定義
2.1 起源
2.2 定義
2.3 迷信と宗教の違い
第３章　迷信の種類
3.1 伝統、習慣に由来する儀式やジェスチャー
3.2 禁忌
3.3 予兆・前兆（悪い前兆並びに良い前兆）
3.4 超常現象
第４章　社会に与える迷信の影響
第５章　科学と迷信
第６章　おわりに

第１章 はじめに

迷信とはいつも悪いイメージが浮かぶものであり、一般的には、道徳に反するような知識や俗信のうち、社会生活に実害を及ぼすものだと言われる。例えば、肺結核に石油を飲む、傷口から血が出ているのに気付いたら傷口を押さえ舌でなめる、紙の人形で身をなでて穢れを移して川に流すと病などの災厄を避けられるなどが知られている。また、風邪を他人に移せば治癒するという慣習にも、風邪という形で露出した穢れを他者に移すという考え方が今もまだ残っているのではないだろうか。これらには科学的ではないものの、特別な力があり、日本人の歴史や伝統に通じて迷信や俗信となった。全く無意味で論理のないものではなく、長い歴史を有し、現在の日本文化の一部になり習慣として日常生活に存在している迷信や俗信もあるだろう。例えば、「夜中につめを切ってはいけない」というのは有名な迷信である。昔は夜になると、明かりもほとんどないので暗くなり、物がよく見えない状態になる。そんな中つめを切ると、刃物で怪我をしてしまい、そこから雑菌が入り破傷風になってしまう。それを防ぐための迷信と言われている。また、“夜詰め”という城の門番の仕事から、夜つめになったという説もある。

古代人が疑わず、絶対正しいと信じていた不思議な迷信のことを理解できるようになった現代人は、非科学的で非論理的なものとして次第に迷信を蔑むようになった。しかし、科学の発展とともにいつも知識人や科学者に非難される迷信という病原は時代とともに消

えていくのだろうか、それとも次々に芽生えていくのだろうか。私は、現代文明の社会に生きている日本人が迷信についてどのような考え方を持っているのかということに興味を持ち、日本の迷信を研究することで、この現象の本質、日本社会に与えてきた影響、古代文化と現代文化、日本人の考え方を理解することができるのではないかと考えるようになった。

本レポートでは、昔からの言い伝えがどのような意味を含んでいるのか、なぜそのようなことが言われるようになったのかということや、隠された民俗的な意味、心意伝承を調査し、考察を加えていくことによって、迷信や俗信をめぐる様々なことを理解し、明らかにしたいと思う。

第２章 迷信の起源と定義

2.1　起源

「人間の精神は、ある種の説明できない恐怖や不安に属するものであるが、それらはある時は私事ないし公事の不幸な状況、不健康、暗い憂鬱な性向から由来するか、あるいはこれらすべての事情の全体から発生している。」

デイヴィッド・ヒューム『奇跡論・迷信論・自殺論』、法政大学出版局（1985）p.60

昔、文明が今のように発展していなかった時代には、風、雨、雷、稲光などといった自然現象を納得できず、恐れる人間たちは、これらの自然現象を説明したいという欲求から、これらを神のようなものとして受け止めた。このため、『古事記』『日本事記』に書かれている物語の中で、風、山、海の神について何度も言及しており、天災が起こる時には神が怒り、人間にお仕置きを与えるというように、神の存在を信じていた。現在、社会の発展とともに自然現象を理解できないという恐れが消えた人間には、難病や悪い目に遭うことなど他の恐れが発生している。特に、自然に従属し、不安定で危険な仕事をする人の日常生活に対して迷信がよく結び付けられる。難病にかかり、何をしても治らず、死ぬのが怖く、死にたくないという心理でどうしようもなくただ奇跡を待つこと、神に助けてほしいとお祈りすることしかできないことも一つの原因として人を迷信に陥らせると考えられる。また、人は安住に生きている時にもそれ以上の良い生活を求めるし、人間なら誰でも健康や幸福な人生を願うものである。何かをする時、例えば、引っ越し、結婚、家の購入、納骨などの時、自分で日時を決めることができず、必ず霊能者や占い師に相談し、その人の言うことに従う人がいる。結婚する前に占いの相性を見に行き、悪いと言われるともう結婚せず、別れる場合もある。現代も古代も人間は知らぬうちに不安や恐怖を持つのだろう。不安から迷信を作り、そして不安を再生産しているわけである。人間には「死」などの未知のものへの不安や心理的緊張を解消しようとする働きがあるからだ、と言う人がいる。また、多くの人が信じているものを自分も信じていれば安心だと思う気持ちのせいだ、と言う人もいる。

2.2 定義

迷信の定義については、多くの異なった見解が存在し、名個人の住む環境と時代、教養によって差がある。しかし、「迷信」という言葉には、何かしら共通するものが存在する。

『日本国語大辞典』では迷信を次のように定義している。

(1) 誤って信じること。誤信。
(2) 現在の科学的見地から見て不合理であると考えられる言伝えや対象物を信じ、時代の人心に有害になる信仰。

迷信とは、人々に信じられていることのうち、無知や恐怖に基づいた、合理的な根拠を欠いているもので、非科学的な考えに基づく信念もしくは行動で、機能的な精神特性を非精神的な事象に求める考え方のことである。先に述べたように、迷信の起源はすべて人の恐れや自分の能力を超えすぎる念願から発症するものである。

2.3 迷信と宗教の違い

起源、性質を比較すると迷信と宗教は相違点が少ない。

類似点：- 無関係なものを結び付けて、良いとか悪いとか言う。
- 不可解な現象を説明する必要性から生まれてきた。
- 根本は人間の恐怖心理に基づいている。
- ある地域や集団内に制限されている。その集団の境界外では迷信も宗教も根拠のないあるいは盲信で無知な行為だと言われる。

相違点：

	迷信	宗教
定義	ほとんどの迷信は古代からの民俗伝承、個人的に言い伝えられているもの。	普及政策や計画、厳格な規則がある団体。
変化	ほとんど変わらない。あっても速度が非常に遅い。	時間とともに変化する。社会の要求、政治的圧力、科学技術の進歩に応じるため比較的速く起こる。

社会との係わり	個人的な行為で新聞、言論、政治家に公然と非難されるのを気にする必要がない。	文章やルールがある団体、公共的な環境で社会観念に追い付くことが必要である。
影響	個人や社会に被害を引き起こす範囲が狭く限られている。	緊密な構造、段級、権威を持つため影響の及ぶ範囲が広い。

第３章 迷信の種類

一般に、迷信は以下の４つのタイプに分けることができる。

3.1 伝統、習慣に由来する儀式やジェスチャー

生まれたばかりの赤ちゃんは迷信について何の知識も持っていないが、大きくなる時、家族や周りの社会を介して徐々に迷信に対する行動、反応、考え方を学ぶ。合理的なことを考えず、機械的に行動するこれらの全てのものは世代から世代へ伝承され、親が子孫に伝え、他人の真似をする儀式やジェスチャーである。例えば、初詣、おみくじ、正月飾り、手相、人相、六星占術など多くの場合、これらのような迷信が「古代の習慣」さらに「民間信仰」の名の下に隠れている。

江戸時代以前にも行われた初詣は、今もなお日本人のお正月の習慣として存在している。初詣とは、その年初めて神社仏閣へ参り、新年の無病息災や平安無事などを祈ることで、元日早朝から行われるものである。元々は「年籠り」と言い、昔時計がまだなかった時、日が暮れる頃が一日の終わりであったので、日が暮れた夕方からが一日の始まりとされていた。大晦日の夕方から元旦の朝にかけて、家長がその土地の氏神様を祀った神社に泊まり込み、夜通しその年の豊作や家内安全などを祈願した。初詣が広まったのは比較的最近で、明治時代中期あたりと言われている。現在では、一般的に元旦、三が日にかけて初詣を行うことであり、参拝した人々は、おみくじを引いて新年の運勢を占ったり、絵馬に願い事を書いたりして新しい年の幸福を祈願する。2014 年にインターネットで行われたアンケートの結果によれば、10 代～60 代の男女 400 人の回答者のうち 68.8%の人が初詣に「行く」と回答していた。また初詣に行く理由については、40%弱の人が「イベントだから」、30%弱の人が「家族や友だちに誘われたから」を選択していた。結果が示す通り、参拝をする行為そのものに意味があり、正月のイベントといった意味合いが強いようである。以上の結果から日本人は初詣に行く意識が意外と高い。さらに、初詣に行くのは神とか占いを信じているからではなく、イベント、決まり事、習慣と考える傾向が強いからだと言えるだろう。

3.2 禁忌

ウイキペディアによれば、禁忌（きんき）とは「してはいけないこと」の意で、タブーとしての禁忌には道徳的な含みがある。

夜に口笛を吹いてはいけない。
北枕に寝るものではない。
箸から箸へ受け取り渡してはいけない。
霊柩車が通ったら親指を隠す。
夜に爪を切ると親の死に目に会えない。
洗濯物夜干しをしてはいけない。
元旦の朝は福が来る。だからほうきにふれてはいけない。

多くの人は自分が無関係なものを結び付けて、あることをするまたはしないことで、他のことの成功、失敗に影響を与え、そこに因果関係があると信じる。昔からの日本の慣習として伝わってきている禁忌は時代遅れになったため、その元々の発生理由が忘れられ、今では説明できなくなったことが迷信や習俗だと言われるようになっている。「食べてすぐ寝ると牛になる」とか「3 人で写真に写った場合、中央にいた人が最も早く死ぬ」などは全く科学的根拠もなく、冗談のようになり、不合理だから迷信であるとも言われる。しかし、迷信だと言われてもやはり気になり、現代ではどこかの日常生活にある行為を制約する多くの習慣が残されている。

― 北枕 ―

日本人の葬式では遺体を北枕に寝かせる風俗があり、「死んだら北枕」というのは、多くの人が認識している葬儀の常識の一つである。お釈迦様が亡くなった時に頭を北の方角に向けていたことから、仏教において頭を北にして寝ることを北枕といい、北を枕にして眠るとお釈迦様のところに行けるといった考え方が生まれた。この為、納棺前の死者を寝かせる時に北枕で寝かせることによって、この世への未練や煩悩を断ち切って成仏してもらおうという考えから仏教では死者を北枕で寝かせる風習が生まれたそうである。その風習が始まり、生者が北を向いて寝るのは縁起が悪いこととなった。元々葬式の時だけに行われる習俗であり、日常の生活では忌まれる、してはいけないことになる。

― 霊柩車を見たら親指を隠せ ―

「霊柩車を見たら親指を隠せ」というのは、有名な迷信で日本人なら子供の頃にそうした経験がある人も少なくないと思う。日本の精霊崇拝には、古くから古代人は親指を自分の霊魂の出入り口とする考えで死者の穢れが自分の魂に入りこまないように親指を隠したと思われていた。但し、この迷信は霊柩車が普及した大正時代以後に広まり、親は大切なので、死んだ人に連れて行かれないようにと考えた親の命を死者に取られないために親指

が親を意味して親指を隠す禁忌ができたと言われる。この行動を通じて、いつまでも身内の死の悲しみを引きずらずに生きようと考え、日本人が長期にわたって受け継いできた、よりよく生きるために有益なものではないだろうか。このような迷信は日本の伝統的な知恵を表している。

―忌み言葉―

日本の言霊信仰ではある言葉を口に出すとその内容が実現するという。縁起が悪い言葉を避け、一種の宗教的信仰とも言えるもので，祝詞、忌み言葉もその現れである。日本では特に結婚式の禁句が多くある。古いスピーチ本には、別れる、切れる、終わる、離れる、割れる、破れる、死ぬ、痛い、くれぐれも、ふたたび、などを縁起の悪いものと考え、不快に感じる言葉を「使ってはいけない」と記載されており、常識ある人なら発することはない。結婚式のスピーチでは、その忌み言葉の代わりに他の言葉に言い換える。

ケーキを切った時の ➡ ケーキにナイフを入れた時の息の合った
先ほどの鏡割りで ➡ 鏡開きの勇ましいお姿
お二人にはくれぐれも ➡ お二人にはあらためて明るい家庭を期待し
頑固な性格が災いして ➡ 意志が強く 時に理解を得られない事もあり
いささか頼りないところがあり ➡ 控えめでやさしい性格が誤解を招く事もあり

3.3 予兆・前兆（悪い前兆並びに良い前兆）

縁起というと、「茶柱が立つと縁起が良い」や「昨夜は蛇の夢を見たから，今日は縁起が良い」といった愚意である。こんな場合の蛇や茶柱は縁起の良いことを予知させる兆し、前兆である。関係のないものを単純に結び付けて、因果関係を持たせ、長い間の経験的知識によってやがてくる善悪の運命を何かの現象で予測するわけもある。自然現象とか特定の動物、植物の異常な動作や現象を前兆とする場合や、夢に見たことで夢が未来についての情報を提供する幻想をもとにする知識があり、国民の大部分は生活の知識として決まりのようなことを知っている。

―招き猫―

日本では猫に関する迷信、俗信が非常に多い。特に招き猫という独特の文化があり、昔から猫は、商売繁盛や幸運がやって来るということで、ツキを呼ぶ動物としてかわいがられている。今では、日本だけでなく海外にも、その文化が伝わり、日本製の招き猫の人気は高まっているようである。そして白猫は「福を招く」色として幅広く支持され、また、黒猫は「厄除」、金猫は「金運を招く」、ピンク猫は「良縁を招く」という意味があり、その他にも、赤猫は「病除け」、青猫は「交通安全や学業向上」、緑猫は「合格」、オレンジ猫は「仕事運」と、それぞれの願いを込めた猫の色を選ぶ。

― 黒猫が不幸をもたらす ―

「黒猫＝不幸」というイメージが固定化されてしまった理由は、ヨーロッパにおいて、黒猫が魔女の使い魔としてみなされてきたことや、「黒」という色が人間の心理に対して与える微妙な影響力を持つことに因る。人々が黒猫を不気味であると感じてしまう理由の 1 つとして、「黒」という色が持つ色彩心理学的な側面から考えると、人間は暗めの色があまり好きではなく、経験を通じ感覚が強められる可能性があるということである。黒に関連したものには、闇夜、曇り空、腐敗物、クモ、昆虫、かさぶた、ドブ川など、人間に嫌悪感を抱かせるものがたくさんあり、こうした対象物に何度も接していると、「黒色＝何となく嫌な感じ」という先天的な感覚が、自分でも知らないうちに強められていく。そして、黒に対してネガティブな印象を抱くことが癖になった人が黒猫を見た時、「理由は分からないけど…何となく不気味だ」という感情を抱くようになるかもしれない。また、生活の中で電気が普及するようになったのは 1800 年代後半からで、それ以前は月の光や火の明かりを太陽が沈んでからの光源にしていた。こうした真っ暗闇の道端で、黒猫は黒い被毛が迷彩色となって闇夜に溶け込んでしまっているため、らんらんと輝く瞳だけが強調されることになる。暗がりの中で浮かぶ不気味な 2 つの光を見た人は、さぞ恐ろしく感じたことだろう。昔の人にとって、猫はまさに化物に限りなく近い生き物だったようだ。

― 茶柱が立つと縁起が良い ―

「茶柱が立つと縁起が良い」という俗信が広まったのは静岡県に位置する駿河からだそうで、日本人にとっては結構人気のある迷信である。占い・縁起担ぎについてのアンケートによれば、「つい守ってしまう or 信じている迷信はありますか？」という質問に対する回答の第 1 位がこの「茶柱が立つと縁起が良い」で、回答者 3,221 人のうち 46%の人が選んでいる。このような迷信が生まれた理由は何だろうか。昔、あるお茶の商人が一番茶の新芽の良いお茶ばかりが売れ、二番茶が売れ残る事態に困っていたそうである。二番茶は成長している分、茎が多く混ざってしまうのが特徴だ。そこでこの商人は「茶柱が立つと縁起がいい」と二番茶の弱点を逆手にとって触れまわったという話があるようである。他の理由としては、茶柱が立つ→柱＝家の中心を成すもの→それが立つ→良いあるいは、自家の柱＝大黒柱が立つ、という連想から、一家の安寧や繁栄につながると考えられたとも言われる。

3.4 超常現象

超常現象は、通常人にない超能力を持つ人が経験しやすい現象で，人の健康や生活に影響を与える可能性がある、あるいは死んだ後の彼らを特定の永遠の世界に保存することができると信じられている。呪法、憑きもの、妖怪、幽霊といった霊魂現象は、現在までの自然科学の知見では説明出来ない現象である。

―子育て幽霊―

妊婦が死んで埋葬された後，墓中で出産し，その子どもを育てるために幽霊になって飴屋に買物に来るという昔話である。だんご、餅、菓子、砂糖、乳の粉を買いに来たという例もある。発見された墓中誕生の子どもは，無事に成育して僧侶になったという。その僧の名は，通幻、如幻、梅隠，頭白、上人、正達などと伝えられている。

しばしば実際の寺院と特定の人物に限って述べられるので、伝説として語られる場合が多い。この昔話は，中国･四国地方ならびに東北地方の一部では妊婦埋葬の習俗に基づくと言われている。

第４章　社会に与える迷信の影響

迷信だと分かっていても、個人的な験担ぎ程度にこれを理解すれば、生活にアクセントをつける効用はあると思われる。また、昔の行事や事件を考える時に、昔の人たちが信じていたことの理解が進むこともあるので、全部否定する必要はないと考えられるが、行き過ぎるとやはり「社会に害悪を及ぼす」ことにもなる。

長所

迷信は何も根拠がないように思えるが、実は人の経験に基づいて何回も繰り返し作られたものであり、文化の一部も反映している。日本ではいまだに昔のまま変わらず残っている葬式のマナーもたくさんあり、有名なのが葬式は友引を避け、一般的な認識として、友引の日は葬式をしてはいけないということである。これは元々、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の順序で「六曜」と呼ばれるものの一つであり、江戸時代にそれぞれの日の解釈が広まったようである。

先勝 は 午前中は吉。午後凶。急用や訴訟などは吉。

友引 は 引分勝負なし。葬式や法事は凶。夕刻は吉。

先負 は 午前は凶。控えめに静観すべし。午後は吉。

仏滅 は 大凶の日。何事も忌み慎むべし。

大安は 大吉日。何事も上吉の日。

赤口 は 仏滅と同じく何事も忌むべき日。

「凶事に友を引く」という意味だと解釈され、そのため「友引に葬儀を行うと亡くなった人が友を引き寄せて一緒に冥土に連れて行く」という迷信となり、葬儀を避けるようにな

ったとされている。また、十二支の暦では、ある日のある方向に向かって葬儀をすると友を曳くので縁起が悪いとされていた。その友曳と混同されて、友引も葬儀にはよくない日とされたという説もあるそうである。「友引に葬儀を避ける」のは、迷信からくる単なる習慣で葬式のマナーとしていまだに多くの日本人が共有するものである。

加えて、迷信は古くから深い意味がある習慣を子どもに教えるための『しつけ』だったと思われる。現代も迷信の話は子供の教育方法として活用することができる。特に生活や健康のことは地域の風土をよく表しているものである。例えば、

―食べてすぐ寝ると牛になる。―

食べた後、すぐに横になることは行儀が悪いので注意することのようで、実際食べたすぐ後は、なるべく横にはならずに、少し休憩を取ってから軽く体を動かしたり、歩いたりした方が、健康にもいいという言葉である。

―嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれる。―

昭和３０年以前の子ども達は親からよく言われ、生前嘘をついていると、閻魔様の裁きを受け、舌を抜かれることになると、子供たちを驚かせ戒めた言葉である。嘘をつくのは悪いからやめなさいという意味である。

―靴下を履いて寝たら親の死に目に会えない。―

実際、靴下を履いて寝なければいけない程の冷え性の人は非常に危険で、足先が冷え性ということは、上半身に熱が溜まる。頭に溜まり過ぎると脳卒中になるし、胸に溜まり過ぎると高血圧や心筋梗塞や狭心症になる。内臓が働かなければ「親の死に目」に会えない可能性も出てくるそうである。靴下を履いたまま寝たら逆に血行が悪くなると言われ健康によくないので、しない方が良いという意味である。

―夜に口笛を吹くと蛇が出る。―

蛇ともお化けとも悪魔とも言われる。夜に口笛を吹く家は、「何か良い事があったに違いない」と思われ、近所から妬まれると言われている。つまり「蛇」＝「ねたみ」となるわけである。その他に、科学的に口笛は蛇を呼び寄せる波長だという説もあるようである。ただ現代では、「夜に口笛を吹くと近所迷惑」くらいの考えになってしまっているのかもしれない。

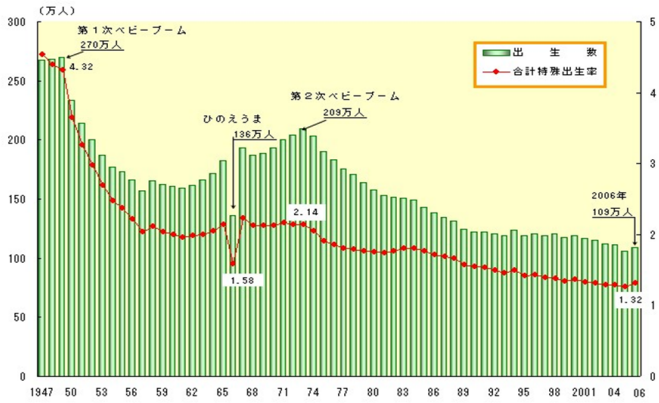
また、不安定や困難な状況に希望をもたらし、精神的な支援を与えることもある。新宿には「新宿の母」と呼ばれる有名な占い師がいて、その前にはいつも若い女性がたくさん並んでいるという。一方、若い人が多い原宿や渋谷には「占いの館」などと呼ばれる店が、ビルの中などにたくさんある。かつては、子どもたちは、自分の悩みを親や先生など身近な人に相談したものだったが、最近は、こういう所へ通って自分の話を聞いてもらう

中学生や高校生もいるのだそうだ。彼らにとって、占いとは、実に身近な存在であると言える。

短所

迷信を信じ過ぎる人は、お金などを奪ったりする目的で簡単に虐待の対象となる可能性がある。不幸な迷信を信じることは無意味に人を不安にさせ、作業を停止させたり、または無駄にキャンセルさせたりする。一人の迷信の弊害が周りの他人にも影響を与える。結婚前に占いに行き、とても最悪な相性だと言われたため、その後悩んでけんかしたり、結婚するのをやめたりする人は今もいるだろう。

悪い影響を与える迷信としては「丙午」が有名である。単なる迷信なのだが、丙午年生まれの女性は気性が激しく夫の命を縮めると言われ、近所から嫌がらせを受けたり、離婚されたりするなど驚くような被害もあったそうである。江戸時代に世間を揺るがした事件が大元だったようで、江戸の八百屋の娘は家が火事で燃えてしまい、避難した先の寺の寺小姓に恋をしてしまった。新しく家が建て直された後も寺小姓への想いが募り、「そうだ！家をもう一回燃やせばお寺でまた暮らせる！」と言って自宅に放火してしまった。すぐに消し止められたのだが、木造住宅主体の昔の日本では、放火は死刑に値する。そのため、放火の罪でこの娘お七は火あぶりの刑になってしまった。



そのお七が 1666 年の丙午生まれだとされたことから女性の結婚に関する迷信に変化して広まって行ったとされる。1666 年日本の出生率が急に低くなっている。子供をもうけないようにしたり、妊娠中絶をしたりする。前年に比べて 25%も下がっている。

もちろんその時は少子化時代というわけではない。少子化時代に入ったのは 1989 年以降である。

また、「丙午」の「丙＝火の兄」と「午」は、陰陽五行でいうとどちらも「陽の火」なので同じ性質が重なることを「比和」という。比和とは同じ気が重なると、その気は盛んになり、その結果が良い場合にはますます良く、悪い場合にはますます悪くなるという意味で、気が盛んだと、周りの人は飲み込まれてしまうことがあると言われる。

第５章　科学と迷信

現代人は何でも科学で解決できると思っている。科学が発展すると迷信はなくなるのか。昔は、病気になると祈祷という儀式を行っていたが、今でも私達は病気の回復を神仏

に祈り、初詣に行ってはその年の健康を願っている。医史学者である酒井 シヅはどんなに医学が進歩しても、病気に対する「恐れ」と「祈り」の方程式は、変らないのだと述べている。病気だけでなく、生活には仕事や家族や恋愛などいくつかの恐れと祈りがあり、古代も現代もなかなか消えないものである。科学の発展した、現代文明の社会に生きている日本人は合理的な根拠を欠いている迷信についてどのような考え方を持っているのだろうか。現代の日本において占いが好きな人は多い。朝のテレビ番組や新聞、雑誌には、必ずといっていいほど占いのコーナーがある。インターネットには、何百もの占いサイトがあり、占い師に直接会って占う以外に、E メールや電話で占ってもらう方法もある。日本の占いは、もともと中国から伝わったものが中心だったが、現在では他の国のものも広く取り入れ、たくさんの種類の占いがある。よくある占いは、誕生日や血液型、手相、人相、名前から占うものや、タロットなど道具を使うものである。しかし科学的な根拠に乏しいにも関わらず信じて、気になってしまう日本人は多い。例えば好きなあの人との相性はどうなのだろうか、自分のことをどう思っているのか、これからどうなるのか、そういったことが気になるだろう。不安の解消とか過去や未来、あるいは他人についての情報が欲しいため、最近は､占いに頼り過ぎてしまう「占い依存症」の人も増えているそうである。そのなかの血液型や占星術などは科学的な感じがするが、実は誕生日や血液型による性格診断も疑似科学の中に含まれている。無関係な血液型と性格を結び付け、そして相性がいいとか悪いとか言うだけのことだから、これも迷信と同じではないだろうか。つまりどんな時代でも、科学が発展しても、迷信は今も日本人の日常生活の中に生きているし、これからも残っていくだろう。

第６章　おわりに

「すべての迷信は、占星術であれ、正夢であれ、予知体験であれ、天罰であれ、当たらないことのほうがずっと多いにもかかわらず、当たらなかった時は見過ごしてしまい、当たった時は大騒ぎをするというだけのことである。」

フランシス・ベーコン

いい迷信があれば悪い迷信もある。占いは当てにならない、あんなの遊びだ、と言いながらも、新聞や雑誌の占いの記事が何となく気になる。運勢がいいとか悪いとか言われれば気になるのは当然だが、それは私たちがいろいろな不安を抱えているから気になるのだ。ある行動が迷信か正しい信か人によって違う。教育レベル、文化水準、技術知識が高くても、迷信の影響に抵抗する能力があるとは限らない。医師、エンジニア、科学者、哲学者、政治家も商人、ホームレスと同じようにこの問題に対して完全に免疫を持っているとは言えないだろう。

迷信が実害をもたらすものであるかどうかはともかくとして、全ての迷信を否定する必要はない。迷信とは、自分は常に宇宙に見られているという考えの下に生まれたものであり、信じるか、信じないかは自分次第である。結局は、自分が行った行動によって自分を取り巻く状況は良くも悪くもなるのだ。

参考文献

蒲田春樹 『暮らしの伝承：迷信と科学のあいだ』朱鷺書房 (1998)

北原保雄他『日本国語大辞典』小学館（2000）

北山哲『なぜ夜に爪を切ってはいけないのか：日本の迷信に隠された知恵』角川 SSC 新書 (2007)

ギロビッチ、トーマス『人間この信じやすきもの―迷信・誤信はどうして生まれるか』認知科学選書（1993）

今野圓輔他『日本人の習俗迷信・日本人の生活全集第 5 巻』岩崎書店（1959）

竹野静男「西鶴-海音の遺産　八百屋お七物の展開」『日本文学』vol.32、日本文学協会編集刊行（1983）

永野忠一『猫の幻想と俗信』（習俗双書 no. 9）習俗同攻会 (1978)

ヒューム、デイヴィッド『奇跡論・迷信論・自殺論』法政大学出版局（1985）